

いました。伊勢市はほとんど爆撃されなかつたのですが、すっかり混乱して、人に道を聞きながら妻の実家に辿り着きました。二人の子供も私を覚えていてくれ二人を一緒に抱き締めました。

留守中、出征兵士の宅に最低の補助があり、何とかやってこられたと妻も言っていました。いつまでも遊んでいるわけにもいかず、と言って余剰物資皆無の折から三越へ再就職ともいかず、人の世話で渋沢倉庫に定年まで勤めました。

八十歳も過ぎると仲間が一人去り一人逝き、寂しいものですよ。老兵は去るのみですか。

私の軍隊記・シベリア行き

大阪府 出口 昌好

入営した時は両親も健在で姉三人、第一人の五人兄弟でした。

商業学校を卒業し、直ぐ大阪の丸紅に入社しました。

三年勤めたとき、現役兵として、独立山砲第三連隊に入隊しました。出生地が大分県でしたので所属したのは、久留米師団管下の独歩連隊です。

―入隊後の軍歴は―

昭和十八年一月の入隊で、昭和二十三年の七月の復員です。足掛け六年の軍歴で半分以上は抑留生活でした。

独立山砲に入隊後、数日を出でずして博多西公園に集結、博多港から釜山入港。朝鮮半島を北上し、奉天北部の開原に駐屯している独立山砲第三連隊第二大隊第五中隊に配属になりました。それが軍隊生活と抑留生活の始まりでした。

満州に駐屯していた時は警備が主で、ソ連が侵入するまで戦闘らしい戦闘はありませんでした。

―初年兵教育の一端をどうぞ―

何しろ馬の体に触れるのが初めてで、馬との生活がその後二年余り続きました。起床して点呼が終わると駆け足で厩舎へ行く。酷寒の寒風が吹き荒び、水の張るバケツの水での蹄洗、塗油は指の感覚をなくします。

初めは好きでなかった軍馬に愛着を感じるのに割と日数はかかりませんでした。人馬一体、馬なくして、山砲隊は行動できないと骨身にしみてわかりました。

こんな実戦さながらの演習もありました。山砲は六個に分解し、各軍馬の背に載せ、弾薬箱は他の軍馬の両横腹に吊って行軍します。敵前数キロの所、歩兵散兵線の直後で、砲手は迅速に砲と弾薬を軍馬から下ろし、結合して観測した目標に向かって発砲する。御者は軍馬を後方の安全な場所に避難させる。訓練された軍馬は砲声に驚くことはない。軍馬が倒れると行軍に支障をきたすので大事にする。行軍中の小休止では必ず弾薬箱を下ろし、御者は馬の手入れをする。砲手は水壚に水を汲み軍馬に飲ませる。馬部隊では小休止の暇はほとんどない。月に何回か実戦さながらの演習でした。

凍てつく零下二〇度の荒野での初年兵訓練の毎日でした。何しろ部隊は比島戦線で戦闘を終えて、赫々たる戦果を挙げ、引き揚げてきた気の立った古兵の中の初年兵生活は厳しい一言でした。

起床して直ちに厩舎に走り馬の手入れ、蹄洗、厩舎の掃除、水やり、飼付けと一時間かけて、終われば兵舎に帰り、わずかの時間で朝食をとる。午前と午後の訓練を終えて、夕方再び朝と同様馬の手入れ、その他掃除、水やり、飼付けを繰り返す。夕食後やと自分の自由な時間を持てるが、兵器の手入れ、軍靴の手入れ、入浴を済ますと直ちに厩舎に走り、夜の水やりをして就寝前の人員点呼となる。

この繰り返しですが、春夏秋冬続きました。初年兵時代の一年間、悪戦苦闘しながらよく頑張ったものだと思います。

—二年兵からの軍隊生活はどうでしたか—

中隊長の薦めもあり幹部候補生を受験したところ幸い甲種幹部候補生となり、昭和十九年一月、一年ぶりに内地に帰還、前橋陸軍予備士官学校に入校しました。学校の教育期間は八カ月で卒業しましたが、この間、原隊は戦況緊迫に伴い第一大隊はサイパンへ、第二大隊は千島列島へ転出していきました。予備士官学校を八月十五日に卒業、原隊の残留部隊のいる沖繩の宮古

島へ、第二大隊出身の見習士官五名は追隨しました。

不思議なこともあるもので、残留部隊は消息不明でやむを得ず、再び前橋陸軍予備士官学校へ戻れとの指示を受け、宇都宮第四十砲兵部隊に着任、三カ月間初年兵教育の教官となりました。十二日に入り、ようやく原隊が北滿にいたことが判明、年末に宇都宮を出発、滿州に向かいました。一月四日北滿国境、鶏寧兵器廠警備隊に転属し三カ月間勤務し、再び転属しました。

新編制による関東軍特殊部隊でハルビン近郊の孫家に駐屯する滿州第一五五〇部隊が転属先です。そこで滿州飛行機と関東軍の共同航空制作を行おうと併せて初年兵教育を行いました。そこで半年近く勤務した折、突然ラジオが関東軍の軍歌を流し、引き続き臨時ニュースでソ連軍が侵入し戦闘状態に入った放送がありました。

ちょうど、私が週番士官勤務中のことでした。部隊は直ちに非常呼集、飛行場警備につき、戦闘態勢に入りました。

八月十五日、昼ごろ、兵器受領のため弾薬庫に赴い

たところ、ラジオで重大ニュースがあった模様、直ちに部隊に帰り終戦の報道を聞きました。部隊長以下、皆、茫然自失、無念の涙を飲む。急転直下、事態は急変、戦闘は終息し一応部隊は帰隊しました。

—それから抑留生活が始まるわけですね—

そうですね。指令を待ち二日後、部隊は武装解除のため、二五キロほど北部にある下士官候補生学校のあった阿城まで行軍し、夕方到着、そこで一泊し翌日進駐して来たソ連軍により武装解除を受けました。

いよいよ抑留生活の始まりです。三年に及ぶ虜囚生活です。その後阿城を貨車で出発、途中横道河子で下車、佐多少尉と二人選抜されて部隊を離れ、ソ連軍の先頭に立たされて、付近の山中にさ迷う軍及び避難民に戦争終結の宣布を三日続けてやりました。途中危険を感じて逃亡し、貨車で牡丹江まで辿り着きましたが、再びソ連軍に捕まりブタ箱に入る。翌朝、海林の元関東軍の弾薬集積所の広い原野に集結した日本軍の中に連行され、我が部隊に合流することができました。二カ月の野営生活で食糧も欠乏し北滿の原野に厳寒が日

一日と迫ってきました。

海林の野営生活中、日本帰還の名目で、一名の將校引率の下、千名単位の日本軍は逐次移動する。部隊の中の我々員外將校十名は他の部隊將校と合流、十一月三日牡丹江駅で明治節（現十一月三日）遥拝を終え、貨車に乗り込みました。

約千名の將校軍団は長い汽笛を後に牡丹江駅を離れ粉雪の中を轟進しました。各人採暖用の薪一束携行せよの指示なので行く先はウラジオストクだと思いついたんです。あにはからんや、汽車は北上する。薄明るくなつた外の景色は紛れもないシベリアの大平原です。

「チタ」の駅構内は照明灯の凍りつくような光の下で、数十条のレールが静かに光っています。この時から我々の本当の戦後が始まりました。

— 抑留の感想はいかがですか —

「忍」の一字。よく無事に帰国できたということに尽きます。氷結一步前のバイカル湖を過ぎ、イルクーツクへ着きます。果てしない旅をつづけ、ウラル山脈

にさしかかったとき、急に下車の命令が出ました。ノボシビルスクという町で、全員入浴と熱気消毒をすまし、さっぱりすると共にシラムを殲滅しました。三十日余の長旅でした。数キロ離れた「ラーダー捕虜收容所」に到着、ここで旅装を解きました。帰国する目当てもなく、生命の保証すらない捕らわれの生活が始まったのです。その日は十二月二日でした。

このラーダー收容所は白雪皚々たる荒野の中の林の中にあります。ここからの三年に近い收容生活は夏はまだしも、長い冬期は極寒と飢餓と望郷の厳しい耐乏生活の日々でした。

收容所は、半地下室で造られ、屋根を被せたものである。天井に小さな窓が二カ所あるだけで、二段に板を敷き並べた寝床が部屋にいつばいに造りつけられ人間はそこに寝転ぶだけです。横二尺、縦六尺が我が居室兼寢室です。戸外は暖かい日でも気温が零下一〇度から一五度、少し寒い日は零下二〇度を超し三〇度以上となります。北の国は太陽の沈むのが早く、午後三時ごろには暮れ始めます。白樺の皮を焚いた明かりで

食事をとるのです。後は真つ暗闇の中でただ寝るだけです。

嚴寒の労働は骨身にこたえました。最初の冬は専ら体力の復活までと、自活のため、炊事、入浴、廠舎暖房のための薪取り作業でした。毎日、二、三〇〇名単位で八、一〇キロ、遠方の時は二〇キロも往復しました。四月、雪解けと共に最初の所外作業が始まりました。志願して二〇キロ郊外のタンポフと言う小さい町へ将校だけで三十名編制し二カ月ほど労働に従事しました。電線の埋設工事で一日のノルマは道路の側面に長さ八メートル、幅四〇センチ、深さ一、二〇センチの穴をロームという鉄斧で掘ることでした。

このラーダー収容所は、北鮮、満州全土、千島・樺太からの全將校、佐官級を含めて約一万名もの將校が収容されていました。

六月になり収容所全員の大移動が行われましたが、タンポフにいた我々は主力に遅れて第五梯団になって移動しました。

―移動先はどんな所でしたか―

貨物列車に乗り、シベリア鉄道を一日ぐらい西方へ行き、タタルのキズネール駅で下車します。幸い初夏なので野営しながら四日間行軍し、ボルガ川の支流でカマ川の港の見える丘にあるエラブガ街の収容所でした。帝政ロシアの名残を留めた教会堂の塔が見える港町といった風景が印象的でした。収容所はAラーゲルとBラーゲルに分かれ我々はAラーゲルに収容されました。Aラーゲルは二階又は三階建ての普通の建物で、初めて電灯のある人間生活に戻り気分も少しは楽になりました。

カマ川の港を見透かす右手の小高い傾斜面に広々とした農場があり、ジャガイモやキャベツが栽培されていました。収穫作業に毎日三百人くらい狩りだされ、失敬して食べた生のジャガイモの美味だったこと。ソ連のジャガイモはみずみずしくその上美味です。

雪が降り始めると伐採作業が待ち受けていました。ラーゲルから二百キロくらい離れた小高い山の中にラーゲル分所があり、ポリシヨイポールという地名で、ここに約八〇名が派遣されました。ここの作業は約六

カ月交代で伐採した原木を七人で麓の集積所まで橇に載せて運搬します。麓の集積場所はマリンキポールという小部落で、エラブガのラーゲルから約一〇キロくらい離れているが、ラーゲルから毎日使用する燃料用の木材をこの集積場所まで採りに来る。山の分所に派遣された我々作業隊は、毎日一回マリンキポールまで、おおむね一立方メートルの原木を橇に積載して山を下る。幅員約二メートルの凸凹のある山道を曲がりくねって運ぶボーダーは極めて危険が伴いました。冬季は橇で、雪の無い時は二輪馬車を人間が動力となって動かしました。

六カ月の任務が終わりラーゲルへ帰ると、漬物受領の仕事が待っていました。山本太朗外七名で志願して船腹に水車のついた客船に乗り、増水したカマ川を四〜五日遡りました。はしけに乗り換え到着港に上陸。漬物はキュウリ、トマト、コショウ、その他の野菜と一緒にしたロシア漬で、大きな樽に詰め込み港まで運搬する作業でした。

― 第三回の移動があったのですか ―

ええ、ありました。七月初め（昭和二十二年）帰還の噂が出ましたが、タタール州都のカザン市の収容所に移動する話でした。第一梯団がカザン収容所Bラーゲル、第二梯団はAラーゲルに入る、我々はAラーゲルでした。第一梯団と第二梯団を合わせて七百名くらいでした。

カザン市はタタール共和国の首都で人口約百万人、街の中心にカザン城が聳え、かつてレーニンの学んだカザン大学もある。

ここでもまた志願して十名常勤の一〇八倉庫という糧秣関係輸送の仲仕作業に従事しました。

この年の十月ころから待ち焦がれたダモイ（帰還）が本格的に実現しました。夢にまで見た祖国への帰還……いよいよ。エラブガのAラーゲルの本隊が第一梯団から逐次、シベリア鉄道のキズネール駅へ出発しているとの情報が入ってきました。

しかしながら、北欧の真冬は厳しい。またシベリアの玄関口のナホトカは既に氷結し始めたとのこと。第四梯団までエラブガA、B両ラーゲル本隊は全員年内

の帰還は実現したが、我々カザン組は涙を飲んでやむなく再々度の越冬となりました。(昭和二十三年)

―その時の心境はどうでしたか―

口惜しかったですね。ここでも軍隊でなく運隊という言葉をしみじみ味わいました。酷寒の越冬は、カーシャ(おか湯)と黒パンで衰弱と疲労しきつた体で再び労役に従事しました。来年こそは来年こそはと希望を抱きながら。

長い長いソ連の冬も過ぎ去り、ボルガ河畔に柳が芽を吹き始めると、川の氷も溶け始めて、再び、グモイの声も聞かれるようになりました。いよいよ五月、グモイです。

五月二十五日、カザン駅を発車した我々のグモイ列車(貨車)は、シベリア鉄道を東へ東へとウラル山脈を越えて、遙か遠くシベリアを横断し、バイカル湖を迂回してハバロフスクへ、ナホトカへと慕進しました。春爛漫、窓外から見渡す限りの広野に花が咲き乱れていました。

ナホトカ到着は一カ月後の六月二十四日でした。ナ

ホトカ収容所でいろいろ取調べやら、検閲等の諸手続を終え、いよいよ祖国へ出発乗船の日がやってきたのです。我々の乗った船は「英彦山丸」です。解で沖合三百メートルぐらいのところまで行き、乗船しました。思わず万歳を叫び、「ソ連の馬鹿野郎」と叫んでしまいました。

―いよいよ上陸ですね―

はい、「英彦山丸」は、日本海を一路横断して舞鶴港へ上陸しましたが、忘れもしない七月二日でした。舞鶴の復員局で三日間復員の諸手続を済ませて、集団列車に乗り込み九州へと帰って来ました。車窓から見るものは皆懐かしく、ちょうど田植えの季節で帰還を祝って手を振ってくれる人たちに涙を流して応答しました。

中津駅へ到着し、耶馬溪線に乗り換えて上の原駅で下車、親戚、身内、友人そのほか皆さんが出迎えてくれましたが、この感激は一生忘れられないものとなりました。

兵役の義務として戦場に行ったことに悔いはありま

せん。勝敗は兵時の常と思う年ごろになりました。しかし、シベリア抑留だけは許せませんね。何と言って戦争のない日本はいいですよ。子、孫にもこの体験を語り継ぎたいと思います。

郷党の模範となれ

近歩第二連隊

岐阜県 小林 仁平

近衛師団は皇室を守る

昭和十五年、紀元二六〇〇年記念の日、徴兵検査を受けた。高山で三五〇人のうち甲種合格は百人、十月、昭和十六年一月十六日東部第三部隊へ入隊せよと役場から令状が届いた。高山の人たちに聞いたが、ほとんどが岐阜の連隊か海軍で、東部三部隊は私一人、しかしこの部隊が近衛歩兵第二連隊とは分からないから、一人だけが東京とは、「これはよわった」と思ったが、場所は麴町区代官町と書いてある。調べてもらったら、

どうも近衛師団らしい。

大正九年四月九日、私は高山で生まれ、お陰でそれなりの教育を受けさせてもらったが近衛師団とは。全国の選りすぐりの兵隊が多いとも言われ、これは大変なことだと、柔剣道を更に習ったり、急ごしらえで勅諭を覚え、作戦要務令や歩兵操典の暗記をしたりして、内心びっくりしていた。

高山では市長が全員を岐阜の連隊へ連れていくというが、私一人は、宮村の一人と一緒に宮村村長が預かって東京へ行った。東京の道路はアスファルト道路で、これが何里も続いている。ネオンもついているし物は豊富にある。東京は偉い所だ、やっぱり都だと思った。一日は父の遠縁の家に泊まり、入営前日は神田の指定された宿へ泊まる。村長は私たちと営門に入り、服や着物を持って帰っていった。

これで我々は兵隊となる。配属は第一大隊第三中隊であるが、当時の近歩第二連隊は現在の武道館の所であり営門は江戸時代からある田安門である。初年兵は六個班に分けられて、第一・二・三班は一般小銃、第